

稽古照今 (古を稽えて今に照す)

「古事記の序文」「温故知新の日本版である」

中遠地区 尾崎雅彦

(一) 雑感 二題 一、記憶

昭和十九年十二月七日、午後一時三十六分、東南海地震発生、当時十一才、(六年生)、過去の記憶は年が経つにつれ楽しいものは早く消え、つらい恐ろしいことのみが残るものである。

丁度昼休み、外掃除で点呼確認中に見舞われた。校舎(木造二階建)が三十度から四十五度ぐらい傾き揺れ動く様子を時間にして二、三十秒、校舎から十メートルぐらい離れたところから見ていた。空気が揺れ動いた様に思えた。立っては居られず這い蹲って砂場へ移動避難した。目撃者はほかに四名位。

校舎がよく倒れなかつたと思議な思いと、木造家屋の強さを感じた。学校の南側五メートルぐらい隔たった鉄工所のブロック塀が土けむりを上げて崩れ落ちるのを目撃した。近くの神社の石垣も約十メートル崩れ落ちていた。また学校の防火用水の水が半分ぐらいに減っていたことも鮮明に憶えている。翌日には袋井西小学校の校舎の倒壊、倒壊校舎の下敷きになって、二十名の生徒が犠牲になったことが耳に入ってきた。

当時は太平洋戦争真只中でアメリカの爆撃機の襲来もあり、市民は二重の備えをしなければならぬ大変な時であった。六十七年経った現在でも、東南海地震については鮮明に脳裏に焼き付いている。記憶からは消えていかな

い。以上のことは二月二十七日、全珠連ブロック別研修会「東南海地震に備えて」の中で講師からまた、会場からも話が出た。その研修会から十二日後に東日本大震災である。

災害対策は早いに越したことはない。二、子供の生活から群が消えてしまった(徒党時代ーギャング・エージが消滅)

最近テレビ・新聞等で「いじめ」について、中学生に至っては殺人に発展してしまうという陰惨な事件が報じられる中、その解決に教師が振り回されている様子が映し出されている。

昭和の中頃までは考えられない事である。当時は子供同志のイジメの解決は殆どと言ってよいほど「ガキ大将」が解決をしている。先生の出番は一切なかったように思われる。

最近のデータによると、子供の遊びの実態調査で「小学校から帰ってどこ

で遊ぶかに対して「家の中」と答えたものが四十%近く、また「何人ぐらいで遊ぶか」に対して「三人」と答えたのが三十六%、「二人」が十九%。通常の遊び仲間が三人以下ということになる。

三人以下の遊び仲間しか持てない理由として

放課後の自由な時間が短縮され、その短い時間内に塾やおけいごとがひしめき合っている。とすれば帰宅が遅れる高学年になれば、友だちと誘い合わせて遊ぶ余裕などほとんどない。宿題など自宅学習をなるべく早くすませようという母親の管理が強ければ仲間と共有できる自由時間は分刻みとなる。

このようにして子供たちはそれぞれの「家庭内に幽閉」されたまま、最低限の時間を孤立してたのしむほかはなくなる。ひとりで遊ぶ相手としてテレビや漫画の比重が高まってくる。インドア化、孤立化の傾向は、こうして必然化する。しかも今日の地域社会では隣り近所のつきあいは等閑視され、かつてのような相互扶助の機能を果たしてはいない。都市においては隣りの住人の氏名、職業さえ知らぬ例が少なくない。

いま、子どもたちが遊ぶ仲間ほとんど例外なく同年齢のしかも同じクラスの子で、しかも自分の家から離れていない、家に近い子どもだけが友だちの資格を持つという、限られた範囲の友だちになる。このようにして、子どもの生活から群は完全に消えてし

まった。かつては地域が子どもの遊び圏であった。それぞれ地域ごとにガキ大将が率いる異年齢集団があり、子供たちはそこに属し、その中で成長し、集団で生きる意味と喜びと辛さを、身をもって体験したのである。

年齢がちがえば遊ぶ能力にも差ができる。だから草野球をするときも、チビはゴロで打たせたり、三振を五振にしたりなどルールを変えて、公平原則を改めてつくり出したのであった。

チビを相手に連戦連勝では自分がおもしろくないからハンディキャップを設けて公平な関係を回復したのである。

チビがつまらないといってぬけてしまえば、彼の遊び欲求は満足できない。ガキ大将文化の特徴のひとつとして、遊び技術の伝承機能があげられる。凧や杉鉄砲の作り方から魚つりのしかけ方、コマの回し方、遊び技術は大きい子から小さい子へ共に遊ぶ場で伝えられてきた。

子ども仲間のリーダーになると別の集団との縄張り争いに勝って、メンバーを守らなければならないし、メンバーのいざこざを取りしきる責任があるし、面白い遊びを開発を期待されるなど、ガキ大将文化は、人間形成のうえで大切な自主性を育て、社会性(法を守るなど) 身体を強健にする、創造力を育てた。

この文化の再来は難しいことではあるが、一歩一歩環境づくりを進めていく必要があると思う。